

獄中の作（橋本佐内）

二十六年夢の如く過ぐ

顧みて平昔を思えば感滋多し

天祥の大節嘗て心折す

土室猶お吟ず正氣の歌

二十六年如夢過 顧思平昔感滋多
天祥大節嘗心折 土室猶吟正氣歌

解説 安政五年（一八五八）いわゆる安政の大獄によって幽囚の身となり、同六年、伝馬町の獄に投ぜられたときの心境を述べた詩である。

語釈 ※二十六年Ⅱ左内の全生涯である。※平昔Ⅱかつての日々。昔日と同じ。※感Ⅱ感慨。※天祥Ⅱ南宋末の忠臣文天祥のこと。元軍の侵攻に最後まで抵抗したが捕えられ牢中で「正氣歌」を作り、宋王朝に殉じた。※大節Ⅱ大いなる節義。宋朝に殉じたことをさす。※心折Ⅱ感服すること。※土室Ⅱ牢。

通釈 二十六年の生派は、まるで夢のように過ぎてしまった。過ぎ去った日々を振り返れば、感慨はいよいよ多い。かの文天祥の守り抜いた節義には常々感服していたが、いまこうして文天祥と同じように土牢の中に囚われていると、土牢の中で悠然と正氣の歌を吟じていた人となり、ますます慕わしく思われるのである。